

まぼろし

国木田独歩

青空文庫

絶望

文造^{ぶんぞう}は約束どおり、その晩は訪問しないで、次の日の昼時分まで待った。そして彼女を訪ねた^{たず}。

懇親の間柄とて案内もなく客間に通つて見ると綾子^{あやこ}と春子とがいるばかりであった。文造はこの二人^{ふたり}の頭^{つむり}をさすつて、姉^{ねえ}さんの病気は少しは快^よくなつたかと問い、いま会うことができようかと聞いて見た。

『姉さんはおつかさんとどこかへ出ましたよ』と綾子は答えた。

『なんて！ 出ましたツて！』と言つた文造の心は何となく穏や

かでなかった。『姉さんは今時分いつでも家うちにいるはずでしょう、あなたのおけいこの時刻だから。』

『姉さんはもうこれからはあたしたちにおけいこしてくださいさらないのよ、』と綾子が答えた。

『姉さんはもうおけいこしてくれないの、』春子が繰り返した。

『お父さんはお宅うち?』文造は尋ねた。

『お父さんはお留守、姉さんはお病気なのよ、ゆうべ夜通し泣いてよ。』

『姉さんが泣いたって?。』

『ハあ、お峰みねがそう言つてよ、そしてね姉さんのお目が大変赤くはなって腫はれていましたよ。』文造はしばらく物思いに沈んでいた

が、寒^{さむ}気^けでもするよう^にふるえた。突然^い暇^{とま}を告^つげ、そしてぼんやり^い自宅^えに帰^{かえ}つた。かれは眩^め暈^{まい}のするよう^な高いところ^に立^たつていて、深い谷底^を見^お下^ろすよう^な心地^{こころ}地^ちを感じ^じた。目^めがぐるぐるして来て、種^た々^々雑^{ざつ}多^たな思^しい^が頭^{あたま}の中^{なか}を環^わのよう^にめぐりだした。遠^{とほ}方^{はう}で打^うつ大^{だい}砲^{ぱう}の響^{ひび}きを聞^きくよう^な、路^{みち}のな^い森^{もり}に迷^{まよ}い込^こんだよう^な心地^{こころ}がして、喉^{のど}が渴^{かわ}いて来^きて、それ^で涙^{なみだ}が^あ出^でそう^で出^でない。

痛^{いた}ましげな微^ほ笑^おは頬^{ほお}の辺^{あた}りにた^だよ^い、何^{なに}とも知^しれ^ない苦^{くる}しげな叫^{こゝろ}び声^{こゝろ}は唇^{くちびる}からも^れた。

『梅^{むめ}子^こはもうおれに会^あわ^ない^だら^う』かれは繰^{くり}返^{かえ}し繰^{くり}返^{かえ}し言^いつた。『し^かしな^ぜだ^らう、こ^んな^に急^いに^あわ^らる^たア何^{なに}のこ^とだ^らう。な^ぜお^れに^あい^あは^ない^だら^う、な^ぜそ^んな^に困^こつ^た事^じ条^{じょう}が

あるなら自分おれに打ちあけないだろう。』

『若旦那わかだんな。』

文造は驚いて振り向いた。僕が手に一通の手紙を持つて後背うしろに
来ていた。手紙を見ると、梅子からのである。封を切らないうち
にもうそれと知つて、首を垂たれてジツとすわツて、ちようど打撃
を待つているようである。ついに氣を引きたてて封を切つた。小
さな半きれに認したためてある文字は次のごとくである。

『御おんゆるしのほど願ねがひ参まゐらせ候そう今は二人ふたりが間まのこと何事なにも水あわの泡あわ
と相成そうあり候そうあ妾めかけは東京とうきやうに参まゐるべく候そう悲かなしさに胸むねはりさくばかりに候そう
えど妾めかけが力ちからに及び難がたく候そうこれぞ妾めかけが運命うんめいとあきらめ申し候そう……さ
れど妾めかけ決して自ら弁解べんげいたすまじく候そう妾めかけがかねて想おもいし事こと今はま

ことと相成り候妾を恕ゆるしたまえ妾をお忘れ下されたし君には値あたなき妾に御心ひろくもたれよ再び妾を見んことを求めたまひそ

梅子』

文造は読みおわつて、やおら後ろに倒れた、ちようどなにか目に見えない者が来て押しつけたように。持っていた手紙を指の間からすべり落とした、再び拾つて、も一度読んだ。『東京へ』と微かすかに言つてまたその手紙を落とした。

鉛のような絶望が今やかれの胸を圧して来た。かれは静かにその手をあげて、丁寧えいに襟えりをあわした。『死ぬるほどの傷を受けた人はちようどこんなふうに穏やかなものさ』とかれは思った。

『幻影まぼろしのように彼女あれは現われて来てまた幻影まぼろしのように消えて

しまった……しごくもつとものことである。自分^{おれ}はかねて待ちうけていた。』文造はその実自ら欺いたので、決してこの結果を待ち受けてはいなかつた。

『彼女^{あれ}は自分^{おれ}を恋したのではない。彼女^{あれ}の性質で何もかもよくわかる。君には値なき妾に候とはうまく言つたものだ！』かれは痛ましげな微笑をもらした。『彼女^{あれ}は今まで自己^{おのれ}の価値^{ねうち}を知らなかつたのである、しかしあ的一条からどうして自分^{おれ}のような一介の書^{しよせい}生^{せい}を思わないようになったらう……自分^{おれ}には何もかもよくわかつている。』

しかし文造は梅子の優しい言葉、その微笑、その愛らしい目元、見かわすごとに愛と幸いとで輝いた目元を想い起こすと、堪^たゆべ

からざる悲痛が胸を衝いて来た。あらあらしく頭を壁に押しつけてもがいた。座ぶとんに顔を埋めてしばらく声をのんで哭した。

かれ

秋の末のことであつた。自分は駿河台の友人を訪ねて、夜に入つてその家を辞して赤坂の自宅を指して途を急いだ。

この夜は霧が深く立てこめていて、街頭のガス燈や電気燈の周囲に凝っている水蒸気が美しく光つておぼろな輪をかけていた。往来の人や車が幻影のように現われては幻影のように霧のうち消えてゆく。自分はこんな晩に大路を歩くことが好きで。霧

につつまれて歩く人を見るとみんな、何か楽しい思いにふけっているか、悲しい思いに沈んでいるかしているようで、自分もまた何とはなしに夢心地になつて歩いた。

九段坂の下まで来ると、だしぬけに『なんだと、酔っている、ばか！ 五合や一升の酒に酔うようなおれ様か！』という声が自分のすぐ前でしたと思うと自分とすれ違つて、一人の男がよろめきながら『腰の大小伊達だてにやあささぬ、生意気なまいきなことをぬかすと首がないぞ！』と言つて『あははははははは』と笑つた。自分は驚いて、振り向いて見ると、霧をこめておぼろな電気燈の光が斜めに射さして大男の影を幻のように映していた。たちまち霧のうちに消えてしまった。この時もしや今のは彼人あれではないかという考えが

電いなずまのように自分の胸に浮かんだ。

『まさか』と自分おれは打消けして見たが『しかし都は各種の人が流れ流れて集まって来る底のない大沼である。彼人あれだってどんな具合でここへ漂きつて来まいものでもない、』など思いつづけて坂の上まで来て下町の方を見下ろすと、夜よは暗く霧は重く、ちようどはてのない沼のようだとところどころに光る燈火が燐りんの燃えるように怪しい光を放ちて明滅していた。

『彼人あれとはだれのことか、』自分おれはここにその姓名を明かしたくない、単に『かれ』と呼ぼう。

かれは一個の謎なぞである。またかれは一個ひとつの『悲惨』である。時代が人物を生み、人物が時代を作るといふ言葉があるが、かれは

明治の時代を作るために幾分の力を奮った男であつて、それでついにこの時代の精神に触れず、この時代の空気を呼吸していながら今をののしり昔を誇り、当代の豪傑を小供呼こどもばわりにしてひそかに快しとしている。自分がかれを七年以前、故郷のある村その村んじゆくで初めて見た。かれは当時そのとき、村の青年四、五名をあつめて漢籍を教えていた。

自分は当時そのころ、かれを見るごとに言うべからざる痛ましさを感じた。かれは『過去』の亡魂である、それでもいい足りない。『封建時代』の化石である、それでもいい足りない。谷川の水、流れとともに大だい海かいに注がないで、横にそれて別に一小沢を造り、ここに淀よどみ、ここに腐り、炎天にはその泥沸き、寒天にはその水こお氷

り、そしてついには涸れゆくをまつがごときである。しかしかれと対座してその眼を見、その言葉をきくと、この例でもなお言い足りないで、さらに悲しい痛ましい命運の秘密が、その形骸のうちけいがいに潜んでまなこいるように思われた。

不平と猜忌さいきと高慢とがその眼まなこに怪しい光を与えて、我慢と失意とが、その口辺に漂う冷あざわらい笑の底に戦っていた。自分がかれが投げだしたように笑うのを見るたびに泣きたく思った。

『国会がどうした？　ばかをいえ。百姓どもが集まって来たって何事をしてかすものか。』これがかれの句調であった。

『東京がなんだ、参議がどうだ、東京は人間のはきだめよ。俊助に高慢な顔をするなって、おれがそう言ったって伝ことづけ言ろ！』こ

れがかれのせめてもの愉快であつた。『彼人あれがどうしてまた東京に来たろう、』自分は自分の直覚を疑つてはまた確かめてその後、ある友人にもかれのことを話して見たが、友は小首を傾けたばかりであつた。その後二週間ほどたつて、自分は用談の客と三時間ばかり相談をつづけ、客が歸つたあとで、やや疲れを覚え、横になつたまま庭をながめて秋の日影がだんだんと松の梢こすえをのぼつて次第に消えてゆくを見ながら、うつらうつらしていた。すると玄関で『頼もう！』と怒鳴る声が出た。自分はすぐ、『来たな！』と思つた。

果たしてかれであつた。

『どうだその後のちは？』これがかれの開口第一のあいさつであつた。

自分が慇懃いんぎんにあいさつする言葉を打ち消して、『いやそうあらたまれては困る。』かれは酒氣しゆきを帯びていた。

『これが土産みやげだ。ほかに何にもない、そら！ これを君にくれる

、』と投げだしたのは短刀であつた。自分はその唐突とうとつに驚いた。

かかる拳動ふるまいは決して以前のかれにはなかつたのである。自分は

もう今日のかれ、七年前のかれでないことを悟つた。『これは右め

手指てさしといつて、こういう具合にさすので、』かれは短刀を拾つて

後ろざまに帯にさした。『敵を組み伏せた時、左でこう敵を押え

て右でこうぬいて、』かれの身振りはさすがに勇ましかつた、

『こう突くのだ。』そしてかれは『あはははは』と笑つた。すべ

てその拳動ふるまいがいかにもそわそわしていた。

自分がかれこれと話して見たが、何一つ身にしみて話すことが
できなかつた。かれはただそわそわして少しも落ちつかないで、
その視線を絶えず自分の目から避けて、時々『あははは』と大
声に笑つた、しかし七年前のこやし哄笑とはまるで違つていた。

命じて置いた酒が出ると、『いや僕はもう飲んで来た、沢山沢
山。』かれは自ら欺いた。

『まあ一つ、』自分は杯さかずきをさした。

『ありがとう、』かれは心中のよろこびを隠し得なかつた。自分
はかれの返杯を受けないで、さらに一杯を重ねさした。さもうま
そうに飲むかれを自分はじつとみ視ていた。かれは飲み干して自分
の顔を見たが、野卑な喜びの色がその満面に動いたと思うとたち

まち羞恥はじの影がさつと射さして、視線を転じてまた自分を見て、また転じた。自分はもうその様子を視みていられなくなつた。

『大ぶんお歳としがゆきましたね、』思わず同情の言葉が意味を違えて放たれた。

『なに、これでまだまだ君なんかより丈夫だろう。この酒は上等だわい。』

『白馬どぶろくとは違いますよ、ハハハハハ』と、自分はふと口をすべらした。何たる殘ざんこく刻無情の一語ぞ、自分は今もつてこの一語を悔いている。しかしその時は自分もかれの変化があまり情けないので知らず知らずこれを卑しむ念が心のいずこかに動いていたに違いない。

『あハハハハハハ』かれも笑った。

不平と猜忌さいいきと高慢とですごく光った目が、高慢は半ばくじけ不平は酒にのまれ、不平なき猜忌は『野卑』に染まり、今や怪しく濁つて、多少血走つていて、どこともなく零落の影が容貌かおの上に漂うている。

自分はなぜ東京に上のぼつたか、またいつ来たか、今どうして暮らしているか、これらのところを尋ねて見ようとしてよした。問わないでもわかる。そして自分は思った、その秘密はかれ自身よりもかえつて自分の方がよく知っているだろうと。

かれは酒を飲むにつれて、しきりに例の大言を昔のままに吐いたが、これはその実、昔のかれに自分で自分が申し訳をして、い

ささか快しとしているばかりである。むしろ時々小声で、『しかしおれももうだめだよ、』とわれ知らずもらす言葉が眞実ほんとうであった。

自分がかれの運命を思つて何とも言えずあわれになつて来た。

もうかれとても自家おのれの運命の末がそろそろ恐こわくなつて来たに違

ない。およそ自分の運命の末を恐がるその恐れほど惨さん痛つうのもの

があるうか。しかもかれには言うに言われぬ無念がまだ折り折り

古い打傷うちみのようにかれの髓を悩ますかと思つたとたまらなくなつて

くる。かれの友のある者は参議になつた、ある者は神に祭られた。

今の時代の人々は彼らを謳歌おうかしている。そしてかれは今の時代の

精神に触れないばかりに、今の時代をののしるばかりにこのあり

さまに落ちてしまった。

『あらためて一つ差し上げましょう、この後永くお交際のでき
ますように、』と自分は杯をさした。かれは黙して杯を受けて、
ぐいと飲み干したが、愁然として頭を垂れた。そして杯を下に置
いた。突然起つて、『いや大変酔った、さようなら。』

自分は驚いて止めたが、止まらなかつた。

『どうかまた来てください、』と自分のいう言葉も聞いたか聞か
ないか。かれの姿は夕闇のうちに消えてしまった、まぼろしの
ように。

(三十一年五月作)

青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「国民之友」

1898（明治31）年5月

入力：土屋隆

校正：門田裕志

2012年7月26日作成

2012年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

まぼろし

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>